

安曇野市ボランティアリーダー研修会

～地域のささえあいで安心して暮らせる地域づくりへ～

令和4年9月10日

長野県社会福祉協議会

橋本 昌之

本日の内容

- 災害が起きそうになったり、災害が発生すると地域はどうなる？
- 日頃の顔の見える関係、支え合いが生かされた事例。
- 地域の復旧復興に向けて

災害について

豪雨災害

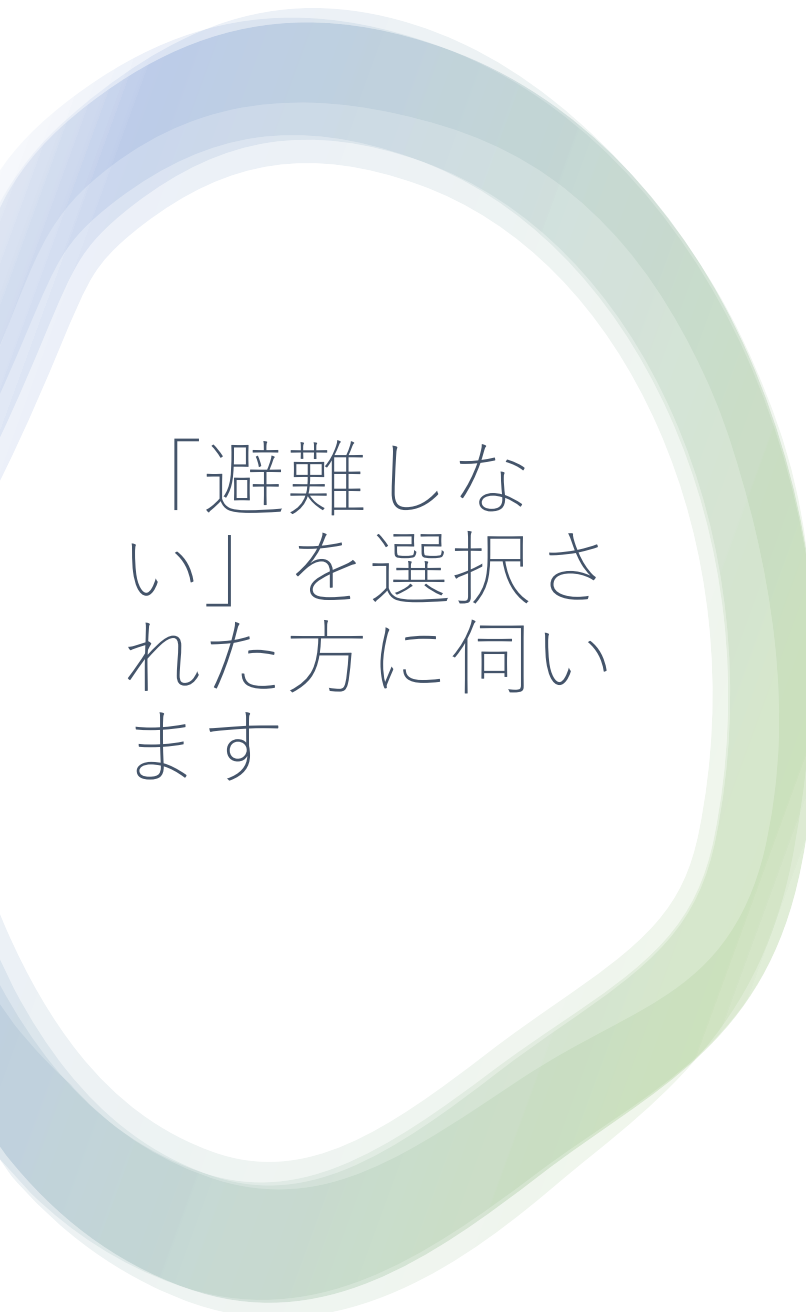
徐々にリスクが高くなってくる。（レベル1～5）

警戒レベル	住民がとるべき行動	避難の情報
5	命を守って!	緊急安全確保
↓ここまでには必ず避難↓		
4	危険場所から避難	避難指示
3	高齢者など避難	高齢者等避難
2	避難方法確認	—
1	最新情報に注意	—

【避難先】

- 指定避難場所・避難所
- 知人・親類宅
- 車中泊
- その時考える
- 避難しない

もしお住まいの地域が警戒レベル対象となったら、皆さんはいつ避難を開始しますか?? また、どこへ避難しますか??



「避難しない」を選択された方に伺います

避難しないと答えた理由として

○ 自宅があるところはハザードマップにのっていない

○ 2階にいれば大丈夫

○ 避難所がどこにあるかわからない

○ 避難所までに行く手段がない

○ 避難所に行くのは何となく気が引ける

・ コロナやインフルエンザなどの感染症が心配

・ プライバシーが保たれない

・ トイレやお風呂が心配

・ その他

皆さんのイメージする避難所

(特に豪雨災害で開設される避難所)



地域には避難したくても避難できない方もいる

○自力で移動できない

- ・避難所が遠い
- ・雨降っていた傘をさして歩けない
- ・坂が上れない
- ・持っていく荷物が多い
- ・近所に頼れる人がいない

○危険がわからない

- ・防災無線が聞こえない
- ・夜間は早く寝てしまった

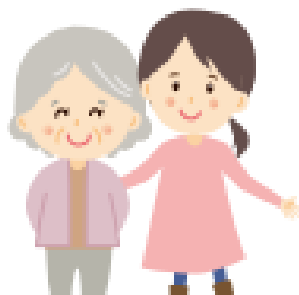
自分の命を自分で守ることができない方もいることを知っておくことが必要。

要配慮者への支援

大規模災害時に最も被害を受けやすいのは、高齢者や子ども、障がい者、傷病者、外国人など情報収集や避難行動を一人で行うのが難しい方々です。こういった方々を災害から守るために、地域みんなで助け合い、一丸となって支援しましょう。

高齢者・乳幼児の場合

あらかじめ災害時の支援者も決めておきましょう。できるだけ複数の人で対応しましょう。



車いすを利用する方の場合

必ず誰かが付き添うようにしてください。段差があるところではゆっくりとした対応をしましょう。



目の不自由な方の場合

「お手伝いしましょうか」とまず声をかけてください。誘導するときは、腕を貸してゆっくりと歩きましょう。



耳の不自由な方の場合

口頭で伝わりにくいときは筆談で。筆記用具がないときには、手のひらに指で字を書く方法もあります。



病気やけが人の場合

程度に応じて、声をかける、肩を貸す、手をそえる等の援助をしましょう。



外国人の場合

孤立させないように、日本語でもいいので声をかける。言葉が通じない場合は、身振り手振りでも、表現しましょう。



地震や水害が発生したら

1, 自宅が被災した場合、復旧するまで長い避難生活

○避難所での生活は共同生活

- ・ プライバシーの課題
- ・ 生活習慣の課題
- ・ 健康や食事の面での課題
- ・ 自宅の再建への課題 など

これら多くの課題について、行政だけでは対応することが困難。避難所内においても住民自治による避難所の運営が重要になってくる。

(声掛け活動、手続きの支援など)

避難所でのボランティア活動 について

避難所を管理責任者は安曇野市ですが、市の職員だけで、避難所を運営することはできません。

避難所の生活では様々な仕事があります

支援物資管理

衛生管理

安全管理

ペットの対応 など

できる範囲で避難所管理者や避難所支援専門職と一緒に避難所運営にも関わる役割を期待されています。

安曇野市で起こりうる地震災害

想定される地震	最大震度（市町村）	安曇野市の最大震度	被害想定(条件は異なる)
糸魚川-静岡構造線断層帯の地震	<u>震度7</u> （長野市・松本市・上田市・伊那市等）	7	半壊40棟 負傷者10名 避難者最大310名
伊那谷断層帯の地震	<u>震度7</u> （伊那市・駒ヶ根市・飯田市・箕輪町・南箕輪村・阿智村）	5強	全壊・消失850棟 半壊1,250棟 死者40名 負傷者310名 重傷者180名 避難者数最大3,210名
木曾山脈西縁断層帯の地震	<u>震度6強</u> （伊那市・駒ヶ根市・塩尻市・箕輪町・南箕輪町）	5弱	全壊・消失100棟 半壊670棟 死者10名 負傷者110名 重傷者60名 避難者数最大1,630名
東海地震（想定M8.0）	<u>震度6弱</u> （伊那市・駒ヶ根市・飯島町・中川村等）	5弱	負傷者10名 避難者最大20名
南海トラフ巨大地震	<u>震度6強</u> （飯田市・阿南町・大鹿村）	5強	半壊140棟 負傷者30名 重傷者10名 避難者最大530名

2, 被災した地域、自宅での在宅避難生活

- ライフラインが停止している自宅での生活
 - ・電気が使えない
 - ・水道が使えない
- インフラが使えない
 - ・病院に通院できない
 - ・買い物に行けない
- 支援が受けにくい
 - ・行政から出される復旧支援に関する情報が避難所と比べて届きにくい
 - ・近所の人が避難所で生活していると、夜間人がいなくなる

プライバシーを保たれること以外は、日常生活に支援が必要な方は特に生活が困難になる。

当たり前の生活を送ることが 困難になる

平時の日常生活において、支援が必要はかたはより大変になるが、普段自立して生活をおくることができていた方でも、被災のショックで「当たり前」の生活ができなくなることもある。

こんな時、近所の人や知人が声をかけたり、支援ができたなら、大変な避難生活でも何とか乗り切ることができるかもしれません。

でも近年の地域の状況は？

- ・ 高齢化による要支援者の増加
- ・ 高齢化や過疎化による支援者の減少
- ・ 平日日中は地域に支援者が少ない
- ・ 地域内での関係性の希薄化
- ・ コロナ感染症の影響による地域活動の中止

地域力の低下
が課題

など



災害で地域のなかで支援を考える前に、知らない人、関係の薄い人からすぐに支援を受けよう、支援を頼もうとすぐに思えない。



平時から地域のつながりを強化していくことが必要

日ごろの顔の見える
関係が活かされた事例

事前避難事例

【令和元年東日本台風(台風19号)災害】

長野市長沼区津野地区（民生委員の取組）

- 市からの要支援者名簿を参考に、日頃の民生委員活動で把握していた支援が必要な方（80才以上で足が悪い人、運転できない人、独居の人、認知症の人、交通手段を持たない人）に対し、できる限り近くの住人と組み合わせを作った。
（要支援者名簿に、要支援者と支援者の組み合わせを記載し、区長と共有）
- 要支援者名簿に記載されていても、自ら避難行動が可能と思われる方に対しては、いざというときは自分で避難していただくよう説明した。
- 支援者への依頼等については訪問するとともに、手紙も作成し配布した。また、区長も個別に依頼してくれた。
- 要支援者、支援者の組み合わせは、体調の変化や状況の変化が双方にあることから1年ごとの約束という形で取り組んだ。
- 地域住民への防災意識の向上の取組として、毎年避難訓練を実施するとともに、年2回のお茶サロンや介護体操時に洪水時の避難について、具体的イメージをしていただけるよう資料を作成し周知していた。

■台風第19号災害における民生委員さんの動き

日時	動き
12日 18時00分	○避難誘導開始【避難勧告1（警戒レベル3）】 ・区長代理から6時間後に避難指示が発令されるので要支援者等に連絡するよう指示がある ・約30世帯に電話。（概ね2時間）
20時00分	○津野区自主防災会の緊急連絡網が回る【避難勧告2】 ・自分は翌日のお祭りの準備が朝9時からだったので自宅にとどまるつもりでいた。
23時30分	○息子が来て、立ヶ花の水位が8.5mであり、このまま上昇すると避難しなければいけないとの情報入る。
23時40分	○長野市【避難指示（警戒レベル4）】
13日 0時00分	○立ヶ花の水位が10mとなり、自らも避難した。
1時00分	○消防団が半鐘を5分間打ち鳴らした。 ・これを聞いて避難した人もいたと聞いている。
3時45分	○自宅と診療所が水没（推定） ・診療所の待合室の時計がこの時間で停止していた。
4時44分	○長野市緊急エリアメール【災害発生（警戒レベル5）】 ・穂保で住宅2階まで水が来ている。

※区長と民生委員で連携して災害に対応した

①良かった事

- 長沼自治協議会が避難勧告を早期に出してくれたことで、早期に避難を開始できた。
- マップを作成し、日頃から災害への心構えや準備を民生委員、区長等が要支援者と支援者のこと、避難場所のことを伝えていたことが生きた。
- 防災ラジオは、最新の情報がリアルタイムで入ってきて臨場感もあり、大変有効であった。（外の音は、雨・風・川の音により聞こえない）
- 事前に避難場所も北部スポレクにと伝えていたことで、避難してからも同じ地区の人が多く安心でき、心強かった。

②課題

- 要配慮者がレベル3で避難ししまうため、連絡網が機能しない部分があった。
- 高齢化率も高く、今後、要支援者に対し、支援者が少なくなってしまう。
- 要支援者が名簿への記載を拒否すると3年間対象から外されてしまうこと。
- 要支援者名簿の対象者外であるが、支援が必要な方（世帯）をどのように対応していくか。（要介護3の高齢者と息子世帯、寝たきり要介護4の両親と息子の世帯など）
- 寝たきり等の要介護度の高い高齢者は、避難勧告等が発令される前にショートステイの利用等の対応をケアマネに期待したい。
- 地域住民だけでなく、事業所や企業等にも情報提供ができればよかった。
- 民生委員として、担当住民数がそれほど多くなかったため、平時・災害時の動きができたが、民生委員によってはもっとたくさんの人数・世帯を対象にしていると聞く。その場合、こういった取組は難しいのではないかと感じている。

※地区全体での取組が重要

地震災害での地域住民による救出活動事例

白馬村神城堀之内地区

平成26年の長野県神代断層地震において、白馬村堀之内地区では、80世帯220人が生活していたうち、全壊が33棟、半壊15棟一部損壊が32棟の被害があった。そのうち6世帯の11人が倒壊した住宅の下敷きになった。夜間であったため消防や警察が現場に到着するまでに時間がかかったが、住民たちの手によって救出され、重傷者、軽傷者は出たが、死者は出なかった。

住民による救出活動の様子



マップ作りを地区で取り組んでよかったこと

堀之内地区では、災害時住民支え合いマップを作成していた。お年寄りや、体の不自由な方の住む家には赤のシール。そういった方々を支え助ける人が住む家には黄色のシール。更に、もしもの時に、誰が誰を助けるのかを明確にするため家と家の組み合わせを矢印で示し、一目でわかるようにしていた。

マップ作成での注意点として、地区の実態にあわせて、“更新”することが大切。やはり亡くなったり、家族の一員が引越すこともある。そのつど更新して、誰が誰を助けるかをきめていた。ちょうど1か月前に更新したところであった。

スポーツ祭、夏祭りなど、日頃から地域の人々との交流の機会を多く作り普段から顔を合わせていたことが大きかった。

「自分の住んでいる所は大丈夫」ということはなく、10年に一度の災害が今日起きるかもしれないという意識を持ち、行政とのつながりを大切にしながら、災害に強い地域づくりが必要。「公助」が来る前に、自分たちでやれることがある。近所で力を合わせることによって助かる命がある。

7月3日 熱海市伊豆山地区での災害

レベル3 予兆なく土砂がやってきた
避難された住民の声

初期段階で流れ込んだ小規模な土砂を目にし、避難行動をとったといいます。声を出し周囲に避難を呼びかけた男性。その後、大規模な土石流が一帯を飲み込んでいきました。さらに、先に異変を感じた人の叫び声を聞き避難できた人も…

兆を感じづらかった今回の土石流。

そのような中で、**多くの命を救ったのは、異変を察知できた近所の人による“声の掛け合い”**でした。

(参考資料：FNNオンラインニュース)

令和3年7月3日 熱海市伊豆山地区での災害

顔の見える関係が生かされた

迫る土石流、命がけ救出 シー経営の河瀬さん夫妻 **高齢者ら避難所に搬送** **熱海・介護タク**

夫妻の会社は多くの住宅が土石流に破壊された岸谷（きだに）地区にある。土石流の発生は、利用者の通院支援を終えて会社に戻る途中に市の防災メールで知った。事務所まで十数メートルの場所まで土石流が迫り、所有する3台の車両のうち1台を失った。

近所に認知症や足が不自由な高齢者が多いことを知っていた夫妻は、地元の消防団員の手も借りながら手分けして避難を支援した。「最終的には10人ぐらい避難所に送った。気付いた時にはずぶぬれだった」

突然の災害で普段から服用する薬を持たずに逃げた人も多くいたため、避難所で薬が不足していることを会員制交流サイト（SNS）で発信した。これに市内の複数の医療機関が反応。診察や処方を買って出たり、経口補水液などを避難所に届けてくれたりと、支援の輪が広がった。

（参考資料：静岡新聞）

介護タクシーによる搬送や消防団との連携は、平時から地域のことを知っていたからこの活動ができた。

被災後の助け合い

断水による生活用水の確保について

災害により地域全体が断水となり、復旧には長期間かかる。飲料水の配布はペットボトル等であるが、掃除をしたり、洗濯をしたり、トイレをながしたりする水は給水所まで汲みにいかななくてはならない状況が続いている。被災地区は坂が多く、暑い季節となるなか、重たい水を取りにいくことが困難な方に対し、近所の若い人が替わりに取りに行き配っていた。



日頃のつながりがあると、支援者、要支援者という決められた関係性ではなく、自然な「ささえあい」につながる

早めの避難の重要性

民生委員の死亡事例

令和3年8月14日午後7時40分ごろ、大雨特別警報が出されていた長崎県西海市西彼町上岳郷の用水路（幅1メートル、高さ1・3メートル）で近くの無職、北村ヤエさん（73）が見つかった。用水路の外には地域の民生委員の田崎文子さん（70）も倒れており、その場で死亡が確認された。

田崎さんは同日午前11時ごろ、北村さんから「怖いから来てほしい」と連絡があったため、北村さん方に向かったという。しばらくたっても帰宅しなかったため、心配した田崎さんの親族が北村さん方の周辺を捜していたところ、用水路内で水につかった状態の北村さんを発見し、消防に通報。その後、近くの用水路の外で田崎さんを見つけたという。

西海市には14日午前5時すぎから大雨特別警報が出されていて、2人が見つかったとき、現場の用水路は大雨の影響でふだんよりも水の流れの勢いが増していた。

もし大雨特別警報が出た時点もしくはその前に避難ができていれば、命を失わずにいられたかもしれません。

地域の役割の確認等についても自主防組織と連携して、ボランティアリーダーさんの活躍が期待されます。

地域の支え合いを進めるために、
一番必要なのは、日常的に顔の見える
関係が作れること。

災害時に隣近所で支え合って避難するには…
いざ災害の時に、声かけあって避難できる???
日常的に隣近所であいさつや会話ができれば
助けるほうも助けられるほうも気を使わない。

「顔が見える。顔がわかる」

ことが**安心感**につながる。

災害が発生した時どうするということと同じくらい、普段の地域の関わりを強化することも減災活動といえる。



令和4年 8 月豪雨 新潟県村上市の状況

8 月 3 日の大雨により床上浸水 5 1 8 棟、床下
6 8 8 棟の甚大な被害となった。

発災直後の状況





8月12日の状況

8月26日の状況



地域の復旧復興に向けて

- 避難所生活から、仮設住宅、公営住宅での生活
- ・慣れない土地での生活
 - ・ご近所、地域関係者と離れての生活
 - ・家事の再開や生活成否の発生 など

避難所では地域のつながりは何とか保てていた方が仮設住宅、公営住宅等に移り、孤立した生活になってしまう場合がある。

地域をもとの生活に戻るまでの期間、バラバラになった地域をいかに維持することが課題になる。

地域のサロン活動や集会、連絡会、訪問活動等こんな場面にもボランティアリーダーさんの活躍の場がある

安曇野市で災害が起きたら災害ボランティアセンターサテライトが立ち上がります



地域拠点 (公民館等)

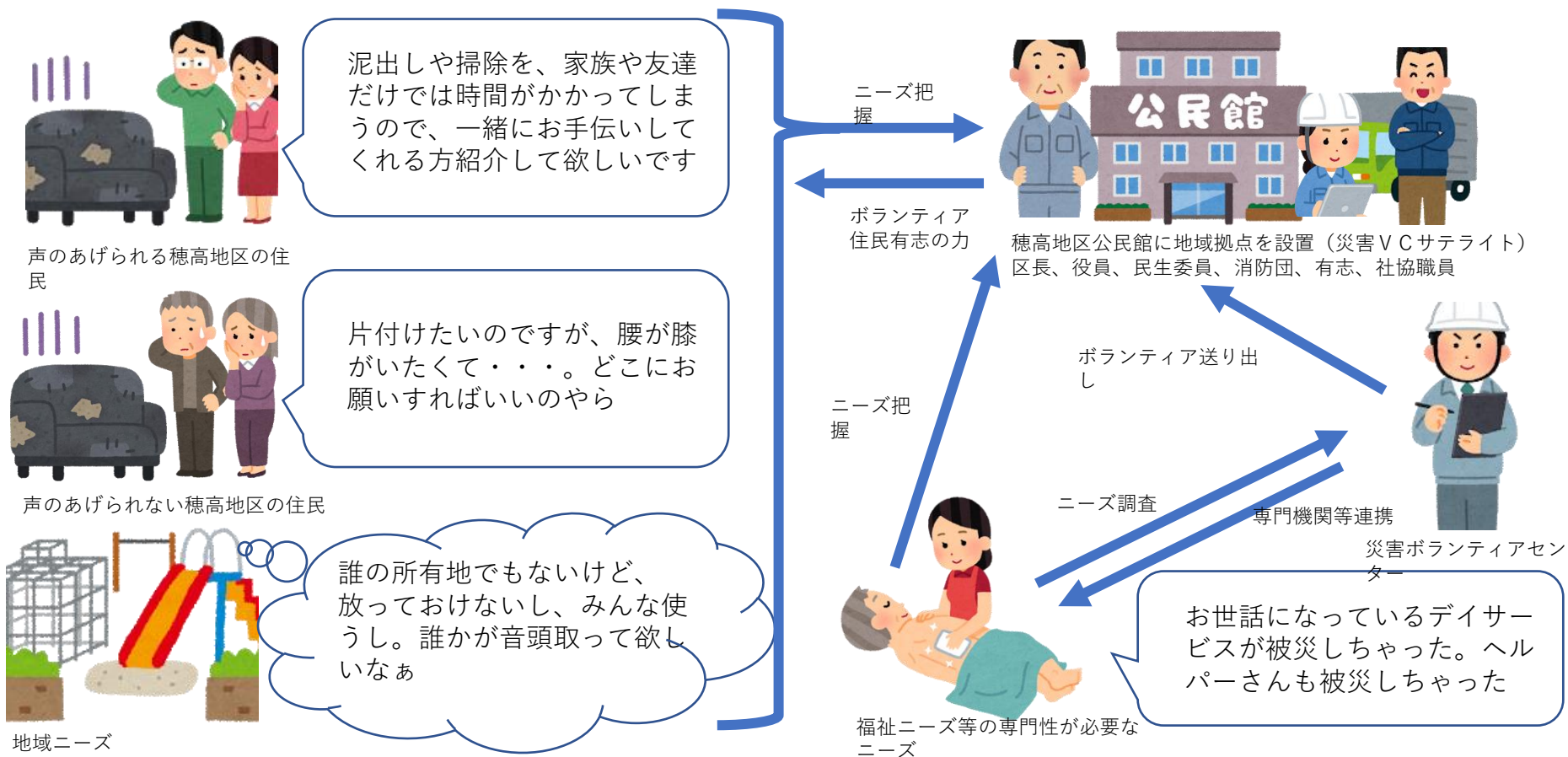
- ニーズ把握
- ボランティアマッチング
- 資機材管理

安曇野市災害ボランティアセンター本部

- ボランティア受付
- オリエンテーション
- ボランティア募集
- マネジメント
- 送り出し

地域のことを一番知っているのは皆さんです！！

安曇野市のコミュニティマッチングの仕組み



ボランティアリーダーは地域の応援団

ボランティアリーダーは災害が発生した際、災害ボランティアセンターと協働で地域復興の先頭で活躍いただくことはもとより、避難生活でも地域の困りごとに一緒に関わっていただきたいと思います。

また、より適切に支援を行うためには、地域のこと（環境、人、モノ、その他いろいろ）を知っていることがとても有効です。

平時から地域にかかわり、地域の応援団になっていただきたいと思います。